

第47回日本病院薬剤師会近畿学術大会コラボシンポジウム1 実施報告

高橋 一栄¹, 永井 純也²

¹ 大阪府済生会野江病院薬剤科, ² 大阪医科薬科大学薬学部

第47回日本病院薬剤師会近畿学術大会コラボ シンポジウム1の概要

第47回日本病院薬剤師会近畿学術大会コラボシンポジウム1(以下, 本シンポジウム)は, 一般社団法人大阪府病院薬剤師会と一般社団法人日本薬学教育学会との共催シンポジウムとして, 第47回日本病院薬剤師会近畿学術大会〔於 グランキューブ大阪(大阪国際会議場)〕の2日目〔2026年2月15日(日)〕の9:00~10:30のセッションとしてプログラムに組み込まれ, 実施された。本シンポジウムのタイトルは, 「薬剤師として成長していく私, 今, やるべきことは…!? ~医療現場と大学の連携から, 輝ける未来について考えよう~」と設定された。参加者は大会事務局報告によれば190名であった。オーガナイザーは高橋一栄(大阪府済生会野江病院薬剤科)と永井純也(大阪医科薬科大学薬学部)が務めた。本シンポジウムでは, 臨床現場と大学との接点を持ちながら, 新たな挑戦に取り組む薬剤師3名に各自の目指すべきビジョンを語っていただき, これから薬剤師として経験や研鑽を積んでいく若手に対する羅針を示していただくことを主な意図とした。加えて, 薬剤師を輩出する唯一の学部である薬学部の教員が, 臨床現場とどのように, そしてどのような接点を持ちながら薬学教育・研究に携わっていくのかについても考える機会となることを想定して実施された。3題の講演後は, ICTツールで参加者から投稿があった質問などをもとに自由討論が活発に行われた。

本シンポジウムの内容

本シンポジウムは, 講演3題を挟む形で, オープニングでの趣旨説明とクロージングでの総括という形式で進められた。座長は勝浦正人氏(市立吹田市民病院薬剤部), 角山香織氏(大阪医科薬科大学薬学部)に務めていただいた。

オープニングでは, 矢野良一氏(大阪医科薬科大学薬学部)から本シンポジウムの趣旨とセッション中に参加者に利用していただく双方向コミュニケーションアプリについての説明がなされた。なお, 本シンポジウムでは, セッション中にスマートフォンなどから双方向コミュニケーションアプリを用いて, 講師への質問やコメントを投稿できるシステムを導入した。

講演の1件目では, 瓦比呂子氏(社会医療法人岡本病院(財団)くみやま岡本病院薬剤科)から「臨床現場で20年, その後学び直しを経験して」と題して講演がなされた。臨床現場での経験が20年近くになった頃, 自身が現場の第一線で動くというより, マネジメントする側にいることがメインになり, 後輩たちに伝えられるスキルのストックに限界を感じ始めたことに加え, 学会発表を重ねていく中で「研究」を進めて行く上での基礎がないことに不安を感じる事が多くなっていったことが述べられた。その折に, 京都薬科大学が薬剤師向けに提供するLehmannプログラムの「研究計画・実践コース」を履修し, 研究計画書の書き方からデータのとり方, 最適な分析や解析の方法など, 基礎から学ばれたことについての紹介があった。大学病院や大規模病院以外で働く薬剤師にとって「研究」や「論文」はまだ高いハードルであるものの, 同プログラムの履修を介して大学教員のサポートが得られ, 初めて納得のいく「研究」を行うことができたことなどが紹介された。薬剤師は臨床現場で感じた薬学的課題を「研究」という形で明らかにし, 社会貢献に繋げていくことが求められており, さらに臨床現場の薬剤師と教育機関である大学とが連携を取ることは「研究」のすそ野を広げていく上での近道になることが, 講演において述べられていた。

講演の2件目では, 藤本亜弓氏(大阪市立総合医療センター薬剤部, 大阪医科薬科大学大学院薬学研究科薬学専攻博士課程がんプロフェッショナル養成コース)から「臨床・教育・研究の交差点に立って気づいた薬剤師の挑戦~ Onco-general

Pharmacist を目指して～」と題して講演がなされた。大学時代はごく普通の学生であったが、ジャンルを問わず支えられる薬剤師になりたいという思いを抱きながら勉強に励んでいたことを述べられた。薬剤師として従事し始めた後、ある患者さんとの出会いを契機に「Onco-general Pharmacist」を志し、がん専門薬剤師を目指したことを述べられた。がん専門薬剤師の資格取得を目指す中で、自身の臨床知識を深めるとともに、後進育成の重要性を感じてがん学習塾を立ち上げるなど教育活動にも取り組みながら、10年目にがん専門薬剤師を取得した経緯を紹介された。その一方で、臨床現場で日々生じる疑問に対し、学術的な視点から十分な答えを出せず、社会に貢献できていないのではないかと感じていた折に、学会で母校の恩師と再会し、自分の原点を再確認した。そして、「患者さんはもちろん、後進を含む多くの人の支えになりたい」、「そのために臨床と教育を、研究でつなぎ、循環させる薬剤師になりたい」との思いを強くし、大学院進学を決意したことを紹介された。

講演の3件目では、宮本朋佳氏（兵庫医科大学薬学部）から「大学教員と臨床現場薬剤師の連携がもたらす相乗効果」と題して講演がなされた。病院薬剤師としての勤務時に、臨床から得た疑問の解決において、学会発表や議論はできるが、その成果を学術論文としてまとめるまでには至らず、歯がゆい思いをしていた。この経験が働きながら大学院へ進学する決意へと繋がり、大学院で基礎研究による論文を作成したことをその後の臨床現場における臨床論文作成へと応用することができた経験を紹介された。現在は臨床経験を持つ薬学部教員として、学生教育において今の医療現場の生の空気感を伝えることを意識していることを述べられた。さらに、大阪府済生会野江病院の臨床研究員としても在籍し、現在進行形の医療を肌で感じ続けることで教育の質を高めるだけでなく、研究テーマの発掘にも役立っていることを述べられた。また、大阪府済生会野江病院では緩和ケア領域や周術期領域に携わる薬剤師に対して、日々の実践から見出した知見を学会発表へと繋げる支援を行っていることを紹介された。これらの活動を通じて、現場と大学が「顔が見え声が届く距離」にいることの価値の重要性を強く実感していることを述べられた。

上記の3題の講演後は、シンポジスト3名が登壇し、総合討論が行われた。座長が双方向コミュニケーションアプリ上に収集された質問を踏まえて、シンポジストに回答やコメン

トをいただくという流れで進行した。「業務と大学生活の両立における時間的・経済的な問題点とその取り組み」をはじめ、「大学教員に対して期待できること」など様々な視点での意見交換が活発になされた。また、フロアからは、「卒業後はどうしても大学との接点が限られるようになり、大学教員へのコンタクトに対してハードルが感じられること」についての意見が出され、そのことに対して「臨床現場との接点は大学教員にとっても大きなメリットになるため、双方向に連携をしていきやすい環境づくりが大切」といった旨のコメントがフロアからもなされた。その他、アプリ上には質問やコメントを交えた約50の投稿があり、参加者の思いや考えをリアルタイムで共有できたことはとても有益であったと思われた。一方、時間の制約上、すべての質問に対応できなかったことから、こうしたICTツールを用いてリアルタイムで質問を収集する際の課題も感じられた。

おわりに

最後に、クロージングとして、オーガナイザーの永井より、本シンポジウムの総括が行われた。本シンポジウムのタイトルにも掲げる「薬剤師として成長していく私」を踏まえ、薬剤師が生涯にわたって研鑽していくことが求められるものとして示されている「薬剤師として求められる基本的な資質・能力（薬学教育モデル・コア・カリキュラム 令和4年度改訂版）」の項目内容について簡潔な紹介がなされた。加えて、2026年8月22日（土）、23日（日）に大阪医科薬科大学阿武山キャンパスにて開催される第11回日本薬学教育学会大会についても紹介された。

謝辞

本コラボシンポジウムの開催にあたって、第47回日本病院薬剤師会近畿学術大会 大会会長 竹上 学先生をはじめ同大会実行委員会の皆様方に心よりお礼申し上げます。また、本コラボシンポジウムの講師を務めていただいた社会医療法人岡本病院（財団）薬剤科 瓦比呂子先生、大阪市立総合医療センター薬剤部 藤本亜弓先生、兵庫医科大学薬学部 宮本朋佳先生、ならびに本コラボシンポジウムの企画・実施に携わっていただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。